

上天竺観音信仰と天竺進香の現在
—伝統中国の巡礼と社会—
Belief in the Shang Tianzhu Guanyin and the Tianzhu Pilgrimage
Today: Pilgrimage and Society in Traditional China

石川 重雄
Ishikawa Shigeo

Hangzhou is widely referred to as the “Buddhist Land of the Southeast.” In particular, the temple of Shang Tianzhu Si (Shang Tianzhu Faxi Jiangsi) is an ancient temple that, from the time of its founding in the Five Dynasties period to the present, has maintained its reputation as a place sacred to the belief in Guanyin. Belief in the Shang Tianzhu Guanyin spread from around the time of the Song Dynasty, and from the Ming Dynasty wealthy people and peasants from the lower reaches of the Yangzi River, such as Suzhou and Wuxi, made regular, organized Tianzhu Pilgrimages to worship the Shang Tianzhu Guanyin and at temples and shrines on the shores of West Lake. Moreover, the belief in the Shang Tianzhu Guanyin was conveyed to Japan in the form of Tenjiku (Tianzhu) omikuji (fortunes). The Ming Dynasty Taoan mengyi of Zhang Dai describes how, from the fifteenth day of the second month to the fifth day of the fifth month of the lunar calendar, pilgrims gathered in the vicinity of Hangzhou and engaged in pilgrimage activities at sites such as the Three Tianzhu Si, Huxin Ting (an island in West Lake), the shrine of Luxuan Gongci, and the temple of Zhaoqing Si. In addition, in the Hangsu yifeng of the late Ming and early Qing writer Fan Zushu, the Tianzhu Pilgrimage is described as composed of the Tianzhu, Xiaxiang, and Sanshan courses. There are also Ming novels that take the pilgrimage to the Shang Tianzhu Guanyin as a motif, reflecting social conditions and trends at the time. Lu Renlong’s Xingshiyan (10th installment) describes the pilgrimage route as “going first from Zhaoqing Si past Geling to Yuewang Fen, then to Yuquan Yuan, Lei Yuan, Lingyin Si, and the Three Tianzhu Si” and tells of drawing a fortune that predicts good luck.

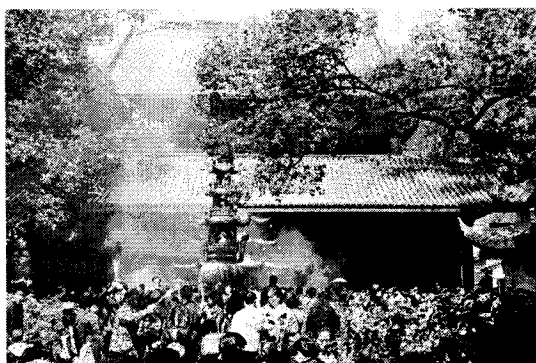
From March 11-16, 2009, I surveyed the Tianzhu Pilgrimage, which has continued to the present. The pilgrimage reaches a peak on the eve of the celebration day of the Shang Tianzhu Guanyin (the nineteenth day of the second month of the lunar calendar, falling on March 15 in 2009), which is called Sushan (lodging at the temple). Sushan is lively with visiting worshippers throughout the night. At about midnight the expensive “shaotouxian,” the incense that originally was the first lit to greet the beginning of the New Year, goes on sale. Both men and women can be seen outfitted for pilgrimage with cords tied at the waist and yellow or blue bags inscribed with “Amida Buddha” and “pilgrimage to the temple to burn incense.” Led by a bamboo pole bearing a flag inscribed “Suzhou Futai Huxing Longshe” is a pilgrimage group of fishermen from Taihu Lake in Suzhou. The elderly women wearing hoods with flower hair ornaments and baggy work pants seem to be a group of silkworm growers. For this symposium, I have summarized the changes through the centuries in the Tianzhu Pilgrimage, which focuses on the Shang Tianzhu Guanyin, and reported on the pilgrimage in its current state.

は じ め に

杭州はこんにち東南の仏国といわれるように有数の仏教寺院がならび、一面宗教都市ともいふべき景観を保っている。こうした都市の構築は五代十国時代の呉越王による宗教政策の影響が大きい。杭州西湖の西側に位置する上天竺寺（上天竺法喜講寺）も呉越王時代に創建された古刹である。とりわけ上天竺寺の観音像を母体とする観音信仰は宋代頃よりひろがりをみせ、明代頃より蘇州・無錫など揚子江下流域一帯の漁民・農民たちが組織的・定期的に上天竺観音および西湖湖畔の寺廟を巡拝する天竺進香の流れができあがった。上天竺寺は現代にいたるまで観音信仰の霊場としての世評を保ちつづけてきたのである。一方、上天竺観音の霊驗、信仰は日本へも伝えられた。入宋して真宗と謁した寂照（寂昭とも、圓通大師）が藤原道長へ「天竺観音一幅」を送ったと伝えられ（『御堂閔白記』）、これが事実だとすれば上天竺観音の霊驗はかれら入宋僧を通じて伝わっていたことがうかがえる。『御堂閔白記』には宋商、入宋僧（寂照、弟子の念救）らとのやりとりがみえ、宋の様々な情報が道長のもとに集積されていったことが知られる。日本に請来された南宋の観音像・画像のなかに上天竺寺観音像を模したのがあるという説がでてくるのも、その真偽はともあれ頷けよう。このほか上天竺観音

の靈驗、信仰は御籤「天竺靈籤」としても伝えられ（伝来時期は室町時代まで遡る）、近世社会において御籤本出刊ブームという社会現象をみた。

筆者は2009年3月11日から16日にかけて天竺進香の調査を行った。上天竺寺では観音の聖誕日（旧暦2月19日、2009年においては3月15日）の前夜に巡礼のピークをむかえ、当地では「宿山」と呼ばれる。「宿山」では夜通し参拝が行われ香客でにぎわう。午前零時ころには高価な「焼頭香」（がんらいは大晦日にお参りし、新年を迎えて点す最初の線香）が売り出される。男女を問わず「南無阿弥陀仏」「朝山進香」の文字がはいった黄色あるいは茶色の頭陀袋を身につけ、その上から腰紐を結ぶという巡礼コスチュームがみられた。「蘇州府太湖興隆社」と書いた旗を竹の棒の先につけた一団、頭には頭巾と花の簪、紺色のもんぺ姿の年配婦人たちもみかけた。今回のシンポジウムでは上天竺観音を母体とした天竺進香の時代的変遷について概括し、天竺進香の現況について報告した。



【図1】上天竺法喜講寺における進香の風景

I 上天竺寺と上天竺観音信仰の梗概

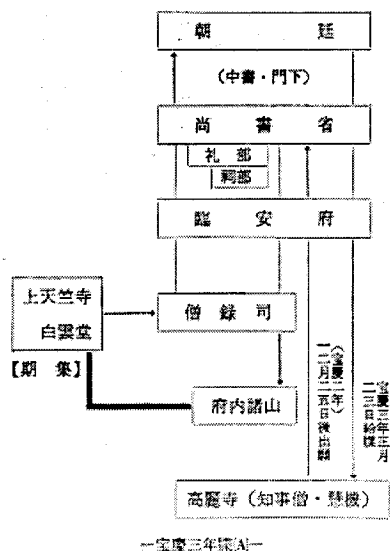
上天竺寺および上天竺観音信仰に関しての詳細はすでに公にした「中国“天竺進香”への誘い」「宋代上天竺寺と上天竺観音信仰」（中文）の二篇（「主要参考文献」）にゆずることとする。ここでは上天竺寺の観音が時代を超えてひろく信奉されていった経緯を述べておこう。

西湖周辺に位置する寺院の多くが呉越王の時代に創建・復興されたものであることは、あまねく知られている。とりわけ上天竺寺は後に教院五山の第一位として諸史料に記されるが、実質的に南宋時代にその地位を確立し、寺産の規模も拡大する。宋代には禅院五山第一位の径山寺と対峙する寺院としての寺格を保有することになる。上天竺寺の住持歴代をみると天台の山家・山外論争以後主流となる山家派、四明知礼の系統が配置されていることが指摘できる。宋代を通じて核となる住持は、北宋時代では南屏梵臻、弁才元浄、慈弁從諫、慧覺齊玉、南宋時代では慧光若訥、柏庭善月、仏光法照であり、ことに南宋時代になると皇帝との結びつきも強固となる。こうした大刹の住持と関連して住持任命の問題も重要である。上天竺寺の白雲堂に禅・教・律三学の大刹住持を集めて住持公選を行い、国都臨安の住持銓衡会議「期集」の手続きを統括したことは、後述するごとく上天竺寺の地位を確固たるものとした。こうして上天竺寺の寺格が高位に上りつめるのにしたが、別稿にも述べたように上天竺観音の信仰は朝廷、士大夫、科挙の受験生、富豪、庶民ら各層にまでおよんだ。そのにぎわいの一端を示すものとして、「錢塘（杭州付近）の天竺観音院に勅を下して毎年一僧を度し香火を奉じさせた。朝廷は常に中使・謁者を派遣し焼香させ貨幣を献じ、毎年大農錢を給い仏事をいとなませ、公卿・貴人たちの貨幣を献じ祈祷しようとするものが治道にあふれんばかりであった」（『咸淳臨安志』巻八〇、志磐『仏祖統紀』巻四五）という記録も残されている。これは北宋・神宗頃のはなしであり、朝廷や官僚らの信仰を伝える。また「紹興二年、両浙（浙江省付近）の進士たちが臨安にて科挙の試験に臨んだ。湖州の談詠とその郷友七人は、上天竺観音にお参りして合格を祈願した。云々」（『夷堅丙志』巻九）というはなしも、官僚を目指す科挙の受験生たちの信奉を伝えるものである。じじつ現存する「天竺靈籤」の内容をみても、訴訟勝利、結婚、転居、科挙合格などといった類の吉凶が占われ、観音に祈る当時の人々の願望が反映されている。さらにのちの天竺進香の鎭矢として注目されるのが「奉仏者には上天竺寺の光明会（こうみょうえ）があった。富豪の家々や大店舗の主人たちが巨大な蠟燭と線香を奉じて、お斎（とき）をふるまい米をお供えし、大々的に法会をいとなむ。お斎や礼懺すること三日。これをもって大福田とするのである。」（南宋・呉自牧『夢梁錄』巻一九）という記事である。富豪民・大店主たちに支えられた光明会にみられるごとく観音信仰の流行は、当時の商業活動の盛行とも関連づけられる。こうした観音信仰の流行を決定づけたのが、上天竺観音の「迎請」（靈驗のある観音を城内に招請して祈祷すること）である。朝廷・皇帝との関わりで重要な事象の一つは国家（朝廷）祭祀であるが、上天竺観音は聖節（皇帝の誕生日）、祝聖（皇帝の長寿）、祈雨、祈晴、祈蝗、祈雪等の祈祷道場としての役割を担っていた。ことに上天竺観音の「迎請」は南宋にいたって頻繁にみられるようになる。まず北宋・真宗期（咸平年間）には、杭州城内の梵天寺において上天竺観音を迎えて挙行された。宋室南渡の後、高宗の建炎四年～紹興元年頃、越州・圓通観音院において一時祈祷が行われた。また建炎年間、金軍の侵攻とともに上天竺観音は城内の法慧寺に安置され、兵・旱の祈祷を行ったことも伝えられる（『仏祖統紀』巻四七）。これにより南宋当初より紹興七ころまで、上天竺観音の「迎請」は法慧寺で挙行された。その後法慧寺には中央官署

II 白雲堂「期集」補論

南宋時代に国都臨安で行われた住持銓衡會議「期集」の存在は、宋・趙升『朝野類要』卷五「期集」に
 応挙士人、欲共陳其利便、則指定一所在、会集諸人、定議以申明之。行都差注諸大寺院頭主、亦集諸頭主、
 相聚定議此人、行檢保明申差、亦謂之期集。

宋代における寺院を辞令発給の文書、相承形態、宗派系統より類別すれば



さて無準師範（佛鑑禪師、1177-1249）は禅宗五山第一位、径山寺の国際化を担い、日中禅宗史、日中交流史の上からも類い希な行業僧として知られる。禅院五山の第一位の径山寺をふくめて五つの寺院の住持に任じられた。いま「徳如筆行状」「道璨撰行状」により、無準師範が住持にいたる経過を整理して、一覧にすると以下のごとくになる。

所在	寺院	初往年	年齢	記 事
慶元府	清涼寺	嘉定13 (1220)	44	「會慶元清涼虛席、太守行下諸山期集、師預公選」 （「徳如筆行状」）
鎮江府	焦山普齊 禪院	嘉定16 (1223)	47	「鎮江焦山虛席、大丞相衛王史主盟佛法、移師主 之、三請而後行」（「徳如筆行状」） 「三年、衛王當國以外護為己任、朝暮拔尤羅致列 刹。京師諸禪以焦山舉師、密院劄奉化津遣。師 不赴。再劄、乃行」（「道燦撰行状」）
慶元府	雪竇山資 聖禪寺	嘉定17 (1225)	49	「又遷慶之雪竇、法席大振」（「徳如筆行状」） 「期年、遷雪竇」（「道燦撰行状」）
慶元府	阿育王山 広利禪寺	宝慶3 (1227)	51	「會育王闕主首、大丞相集輦下諸山公舉、皆曰非 師不可、遂得旨而往」（「徳如筆行状」） 「三年、被旨移育王」（「道燦撰行状」）
臨安府	徑山寺	紹定5 (1232)	56	「是歲少林嵩散席徑山。朝議以師補之、抵京師、 見衛王。衛王曰、徑山住持、異時皆老宿、無力 葺理」（「道燦撰行状」）

無準師範が慶元府清涼寺の住持に任じられる際、太守(知府)が府内の諸山に通達して「期集」を行わせ、無準師範が公選されたことを伝える。国都臨安のみならず慶元府においても住持銓衡会議「期集」の存在をうかがわせる記事である。これについては、もう一つ関連史料がある。「靈隱大川禪師行状」に、

師名普濟、大川其自號。四明奉化六詔張氏子、父友崇、母俞氏、有善操。……又被旨。移天童。職師知藏。
嘉定十年三月妙勝庵席、制府（慶元府）、下諸禪期集、師膺其選、瓣香為涴翁、記所證也。旋遷補陀岳林、
秀之報恩、鄞之大慈、越之天章、京之淨慈、靈隱。凡八遷。……

とあり、大川普濟禪師(大慧宗杲下四世、1179-1253)が慶元府妙勝庵の住持にむかえられる際、府に詔が下され、府下の禪宗諸山によって「期集」が行われた。結果、普濟禪師が公選されている。以上のことから慶元府下の独自の住持銓衡会議「期集」の存在も認められるのである。また無準師範の活躍時代は、宰相にのぼりつめた史弥遠の存在が大刹や名宿の住持任命に大きな影響を及ぼしていたことも注視しなければならない。無準師範が焦山普齊禪院住持となるにあたっては、宰相となった史弥遠が仏教への外護を自己の責務として国都臨安での住持の推薦、公選を自ら主導していた。この時代、臨安府における住持公選、とりわけ大刹・名宿を対象にした住持銓衡会議「期集」制度を敷衍するならば、臨安府内の住持銓衡に関与するばかりでなく、慶元府を含めて臨安周辺の住持銓衡もその支配下に置かれていたことが認められる。

上天竺寺の住持についても触れておこう。北宋時代の弁才元浄は天台の浄土教学の実践者としてだけではなく、地域社会の中で士大夫や民衆の教化者としても知られている。元浄の住持時代はまさに新法党の活躍期でもあった。新法党の政策に背を向けた蘇東坡とも交流を持つ元浄は、一時期上天竺寺の住持の座を追われた。新法党の推進者たる王安石が反体制派を一掃する時期にこの事件は起こった。政治的流動期における住持の脆弱性を示すものである。宋代においては、上天竺寺の住持は公選によるものではなく杭州の知事に招聘される事例が多い。勅差住持制（住持任命に当たり勅牒が発給される）のなかでも推薦形式を採り、寺格が上位にある寺院の形態である。元浄が不在の間は「呉人悦ばず、施者至らず」という状況となり、元浄が住持に復帰すると賑わいもどったという。十方住持体制のもとにおいても、迎える住持がすべて寺院の興隆を持続しえたわけでもなく、浮沈の波があった。宋代において上天竺寺には高僧・名宿が歴住し、住持のなかには柏庭善月、仏光法照のごとく再住ということもみられた。上天竺観音の信仰においても歴代の住持の個性と無縁ではなく、国家祭祀を担い、有力官僚らと交わり、民衆の支持を獲得する寺院運営をもとめられたのである。

Ⅲ 明清期の天竺進香—巡礼のルート

すでに述べたごとく明の張岱『陶庵夢憶』巻七西湖香市に、

西湖香市、起於花朝、盡於端午。山東進香普陀者日至、嘉湖進香天竺者日至、至則與湖之人市焉、故曰香市。然進香之人市於三天竺、市於岳王墳、市於湖心亭、市於陸宣公祠、無不市、而獨湊集於昭慶寺、昭慶寺兩廊故無日不市者。三代八朝之骨董、蠻夷閩貊之珍異、皆集焉。云々

とみえ、旧暦の「花朝」から「端午」にかけて嘉興府（秀州）や湖州といった杭州周辺域から進香客が集ま

り、三天竺寺（上天竺・中天竺・下天竺寺）、岳廟、湖心亭、陸宣公祠、昭慶寺等で香市（マーケット）が開かれ、賑わいをみせる様子を伝えられている。また、明末清初の文人、范祖述『杭俗遺風』にも、以下のごとく「天竺香市」「下郷香市」「三山香市」の三つの香市に分けて巡礼の様子が伝えられている。

【天竺香市】

天竺在西湖之西、北去岳墳尚有七八里、稍南有港曰茅家埠。上山近里許、茅家埠旱路、由花港觀魚、立着草駄、其路較便。二月十九、觀音聖誕、大士最著靈驗。凡祈晴禱雨、無不感應、雖小兒亦知敬奉。十八日、文武百官、自撫臺以下、親往拈香、一切執事、城門口即便打落、不敢開鑼喝道。其敬畏有如此者。百姓有懺會者、均於十八晚間出城、所以自茅家埠起、一路夜燈、至廟不絕。當日去者、自城門至山門、十五里中、挨肩擦背、何止萬萬行人、坐轎者不必言矣。天竺有三寺。上天竺名法喜寺、中天竺名法鏡寺、下天竺名法淨寺、去靈隱山不遠。靈隱者名雲林、亦四大叢林之一也。四大叢林者、聖因・淨慈・雲林・昭慶。僧衆各有五六百人、靈隱山門外、有冷泉亭・瀑來亭・迴龍橋・飛來峯・一線天・呼猿洞、各奇景。冷泉亭上有梁山舟先生書對一聯云、泉自幾時冷起、峯從何處飛來。山門內右首、有逕、達韜光寺。是日熱鬧、亦不下天竺。

【下郷香市】

下郷者、下至蘇州一省、以及杭嘉湖三府屬、各鄉村民男女、坐船而來杭州進香、均泊於松木場、或上岸自尋下處、或歇各寺院房頭、或在船中居住。其船何止千數之多。早則正月盡、遲則二月初、咸來聚焉。須於看蚕時返掉、延有餘月之久。其能來者、均係鄉下土財主、所帶銀錢、無不豐足。故昭慶寺前後左右、各行店面、均皆雲集、名曰趕香市。其進香城內、則城隍山各廟、城外則天竺。及四大叢林、惟行大蠟燭、則天竺一處、城隍廟間有焉。其法造數十斤大燭一支、用架裝住、兩人扛抬、餘人和以鑼鼓到廟、將大燭燃點、即熄帶回、以作照蠶之用。又以黃布白布。或數疋數十疋不等。扯長間段、牽拽而行、名為捨幡。其實白送和尚、香則檀香線香兩種、檀香數百千斤、線香千百十。略為燒點、餘亦送與和尚、故天竺之香布二物、雖市店亦不敵其多。至於點殘蠟燭、倉中散放、更不知其幾千萬斤也。所以天竺和尚、吳山道士、白手求財、吃着不盡。各房頭均有嫡孤子孫、相傳剃度、外人不得而與也。城外趕香市者、不過十分之一、而城中三百六十行生意、夏秋冬三季敵不過春香一市之多。大街小巷、無不挨肩擦背者也。予墳親李玉堂、住居留下、其房分有業竹籃者、每逢春香、一家要做千餘串錢生意、即此而推、各式生意、誠有不可勝計者矣。即如沿途乞丐、挨班坐索、各有位次。自茅家埠至普福茶亭以達上天竺、除棉線蠶豆糕餅不計外、其錢亦可乞得一年糧草也。

【三山香市】

三山者、一曰天竺山、二曰小和山、三曰法華山。天竺無論矣。小和山者、供奉玄天上帝、其地出錢塘門、沿山十八里、至留下、再二十餘里、至山、城中各行、均有香會糾分聚往。多在松木場下船、至水口靈官上山、只十餘里、或數十人、或百十人一起。凡三月聖誕前後、絡繹去者、何止千百十起。總以兩日為期、其香燭以及飯食、均係頭家所備。法華山者、供奉東嶽大帝、地在沿山十八里之中。每逢三元朝審、人家多有解餉、冥鏹一樣、彙繳甚多、皆男婦捨身者所化也。捨身者、各有字號、每號千數人不等、大約通計人數、不下數十萬人。廟祝係俗家所管、香火紙灰、出息不少。靠此榮身、亦有百十餘家。此名三山、每逢三月間、城裏鄉紳、以及大家富戶之婦女。約伴燒香、名曰翻三山。蓋云盡一日之長、燒遍三山之香也。上城出鳳山清波門、由茅家埠、翻桃源嶺、落心涼亭。即法華山、下城出錢塘門、亦先至法華山、齊至留下、一路到小和山、再翻石人嶺、至天竺、來回約百里之遙。再錢塘門外、有地藏殿、名道古橋起至小和山、有十八處靈官殿。所有此等大家婦女、大轎潤管、隨帶僕婦了鬘、其頭面之裝飾、衣裙之鮮艷、窮工極巧、鬬麗爭華、不啻嫦娥下降、仙女臨凡。故留下鄉民、有對一聯云、騰雲駕霧娉婷女、玉葉金枝窈窕娘。蓋極言其富貴尊榮而已。然此特見其一端耳。凡予所叙、四時行樂之會場、莫不有此輩在焉。所以謂之繁華也。

范祖述『杭俗遺風』には天竺進香の内容も記されているが、天竺香市、下郷香市、三山香市として説明され、かつて論じたように天竺進香の流れは方向性を変えて天竺香市、下郷香市、三山香市に受け継がれていることがわかる。行論上再び説明するならば、天竺香市は周辺地域から集まる進香客もさまざま、年三回上天竺観音の誕辰・得道・昇天日に参集し、三天竺寺、岳王墳、湖心亭、陸宣公祠、昭慶寺等を回遊し市を立てたり交易をする。下郷香市の主体は浙江の養蚕農民の男女で、村々で船団を組み、幟を立てやってくる。松木場で船を停泊させ陸路、城内では城隍山各廟、城外では三天竺寺、四大叢林（靈隱・昭慶・聖因・淨慈寺）を巡る。ただ上天竺寺は別格で大蠟燭を供えるという。鈴木智夫氏は、この范祖述の文章（下郷香市）に注目され、明清時代の杭州進香について経済・産業史的観点から論じられている。すなわち杭州進香は江南デルタの農民が先進技術を吸収するこ

とにおいても重要な役割を果たしたという。とりわけ無錫への蚕糸技術の伝播が顕著な例として挙げられ、その結果無錫は清末から日中戦争頃まで有数の蚕糸地帯として繁栄したのである。太平天国の乱という一時的中断はあったものの杭州進香は連綿とつづけられていた。こうした養蚕農家が支えていた巡礼が下郷香市であったのである。三山香市は三天竺山(寺)、小和山(玄天上帝)、法華山(東嶽大帝)を目指し、郷紳から大家富戸の婦女らが主体となる。

このほか、明清代の小説のなかにも巡礼風俗がみえるので、幾つかの文章をを挙げておこう。明の馮夢龍『醒世恒言』第三卷、賣油郎獨占花魁のくだりには、

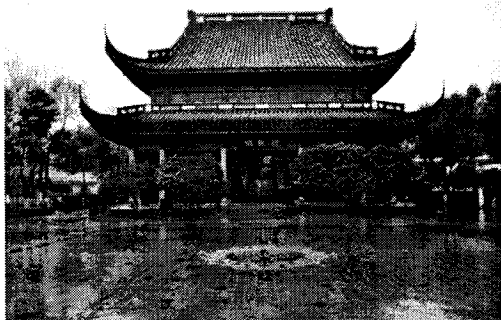
朱重感謝天地神明保佑之德、發心於各寺廟喜捨合殿香燭一套、供琉璃燈油三個月；齋戒沐浴、親往拈香禮拜。先從昭慶寺起、其他靈隱・法相・淨慈・天竺等寺、以次而行。就中單說天竺寺、是觀音大士的香火、有上天竺、中天竺、下天竺、三處香火盛、卻是山路、不通舟楫。朱重叫從人挑了一擔香燭、三擔清油、自己乘輦而往。先到上天竺來。寺僧迎接上殿。老香火秦公點燭添香。此時朱重居移氣、養移體、儀容魁岸、非復幼時面目、秦公那裏認得他是兒子。

とあり、巡拝にあたり、まず昭慶寺から出発し、靈隱寺・法相院・淨慈寺・天竺等寺へとすすみ、就中、天竺寺は觀音大士の香火が盛んであり、上天竺寺、中天竺寺、下天竺寺へお参りする、と参詣の様子が描かれている。

明の陸人龍編『型世言』卷之三、烈婦忍死殉夫賢媼割愛成女のくだりには、

那姑娘又談起親事、周氏與陳鼎彝計議道：「但憑神佛罷、明日上天竺祈籤、若好便當得。」次日就上了岸、洗了澡、買了些香燭紙馬、尋了兩乘兜輦、夫妻兩個坐了、把兩個女兒背坐在輦後。先自昭慶過葛嶺、到岳王墳、然後往玉泉、雷院、靈隱、三竺、兩岸這些開店婦人、都身上得紅紅綠綠、臉上搽得黑黑白白、頭上插得花花朵朵、口裡道「客官、請香燭去」、「裏面洗澡去」、「喫飯」、再不絕聲、好不鬧熱。一到上天竺、下了輦、走進山門、轉到佛殿、……

とみえ、先ず昭慶寺より葛嶺を過ぎ、岳王墳に到り、然る後玉泉院・雷院・靈隱寺・三天竺寺に往く云々とお参りのルートが示され、御籤（「天竺靈籤」であろう）を引く話がみえる。当時、巡礼において重要な場所としては、「松木場」「昭慶寺」などがある。筆者は今回の調査において現地へ赴いた。まず松木場であるが、当時は杭州周辺から農民が船団を組んで巡拝する際、当地で下船して歩いて巡礼にむかう交通の拠点であった。現在は埋め立てられて縦横に幹線道路が走っている（図3）。次に昭慶寺は巡礼の際、もっとも賑わいをみせた香市の場所である。現在は、寺院としての運営はなされておらず、杭州青少年活動中心という青少年のためのセンターの一施設となっており、前に昭慶寺の石碑が建っている（図2）。「天竺香市」「下郷香市」「三山香市」については、さらに調査を要する。



【図2】かつて香市で賑わいをみせた昭慶寺。現在は寺院ではなく「杭州青少年活動中心」の建物として利用されている。



【図3】かつて船団を組んでやってきた香客たちが下船した船着場「松木場」。現在は埋め立てられて幹線道路がはしる。

IV 天竺進香の現在

すでにプロシーディングス論稿「伝統中国の巡礼—宋元時代における接待・施水庵の展開」のなかで紹介したように、大正二年に大陸に渡った浅草萬隆寺住職の来馬琢道は、上海・南京・杭州の寺々を巡拝し旅行記『蘇浙見学録』（鴻明社、1913年）をのこし、次の一文を記している。

今度は一同で何処何処の観音様に参詣に行くと云ふやうなことがある、恰度日本で団参と云ふ具合である、日本なら、大抵汽車で行きますけれども、支那の南の方は何所までも、舟が通じますから、マア日本で云ふ伝馬船のやうなものを一艘借切って、其の舳先に「天竺進香」とか、「朝山進香」とか云ふやうな赤い旗を立てる、即ち、焼香——御参りに行くと云ふ訳であります、さうして皆、てんでに赤い前掛のやうな物を腰に巻いて、今の「天竺進香」とか、「朝山進香」などと書いて、さうして船を一艘借切ってお弁当

や何か一切道具を積み込んで、やつて行く者がある中には、金持ちらしい風をした者は、一軒で船を借切
って出掛ける者もあります、其時には大抵萌黄色の着物を着て、赤い前掛を懸けて行くのであります、こ
れは何所に行つても屢々見受ける所の団参の様子であります、

(原文旧字、ルビ等は除く)

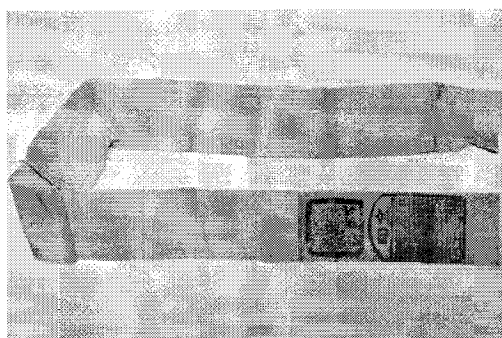
この日記は大正年間における「天竺進香」の様子をつづった貴重な記録といえる。この当時は船着場「松木場」
も埋め立てられてはいなかったのであろう。船団できた香客（参拝・巡礼者）たちは、舳先に「天竺進香」と
か、「朝山進香」とかというような赤い旗を立てたという。現在は、団体の場合バスをチャーターして巡拝をお
こなっている。香客たちの巡礼コスチュームであるが、大正当時は萌黄色の着物を着て、赤い前掛を懸けて、
そこに天竺進香・朝山進香などと書いていたという。現在の香客たちのコスチュームをみると、男女を問わず
「阿弥陀仏」「朝山進香」の文字をいれ、巡拝する寺廟の方印が押された黄色あるいは茶色の頭陀袋を身につ
け、腰紐を結ぶ姿が多い（図4～図7）。「朝山進香」というのは普陀山等各所をまわる巡拝であり、「天竺
進香」は上天竺観音への参拝を主目的とする巡礼であるが、こんにちの香客たちはあまり区別はしていないよ
うである。



【図4】香客が身に着けている黄色の頭陀袋。
「朝山進香」「南無阿弥陀仏」の文字
がはいっている。



【図5】香客が身に着けている黄色の頭陀袋。
巡拝する寺廟の印を押す。



【図6】香客の腰紐。寺廟の印が押されている。



【図7】香客の装束。

さて、霊隠寺前より出て右手に巡礼道がのび、下天竺寺、中天竺寺、上天竺寺へと続く。近年の杭州市政府の
観光政策により道は舗装され、道の両側には最近建てられた店舗が建ち並ぶ。露天はわずかしみられない。
巡礼の蠟燭・線香・衣装・数珠、観音や諸神と交信する際の紙銭・手作りの経典等の販売店はもちろん、衣類・
雑貨・飲食店も建つ。杭州の名産である絹織物・お茶、色とりどりの傘も売られる。にぎやかである。途中、
頭には頭巾と花の簪、紺色のもんぺ姿の年配婦人の集団があった。おそらく養蚕農家であろう。明清時代から
続く伝統を感じる光景である（図8・9）。また竹の棒に「吳江市同里斜港村 劉府普佑上天竺」、「蘇州



【図8】青地の装束をまとった香客の前姿。
養蚕農民の一群か。



【図9】青地の装束をまとった香客の後姿。
頭に花の簪をさす。



【図10】香客(漁民)の旗。「吳江市同里斜港村劉府普佑上天隍」と記される。



【図11】香客(漁民)の旗。「蘇州府太湖興隆社 進香」と記される。

府太湖興隆社 進香」と書いた旗を持つ年配婦人と出会った(図10・11)。濱島敦俊氏の研究によれば、江南デルタ地域、太湖周辺各地に劉姓神が祀られ、劉府普佑上天隍とは江南の土神・劉錡(普佑上天王、清代に驅蝗神・劉承忠の祭祀へと勅が下される)を祀るものである。劉姓神は殆どが実在の人物であり、清代江南地方には劉承忠のほかに劉錡、劉鋭、劉宰、劉軫、劉章などの劉姓神があったことが知られている。劉王廟の祭祀については光緒『聞川志稿』巻二、祠廟に、

劉王廟、一在西方庵。乾隆中、遷瑞華庵之西北、經乱燬。一在連四蕩東北濱(礼部則例、神姓劉名承忠。元時官指揮為民驅蝗。元亡自沈於河、世称劉猛將軍。云々)。吾鄉俗伝、正月二十日開印、八月十四日誕辰、期屆江浙漁船咸集蕩中、以数万計、演戲獻牲。至二三月之交、船之集尤多、謂之網船会。

とみえている(太田出「太湖流域漁民の世界とデルタ調査の可能性」、濱島氏は上海図書館・宣統『聞川志稿』を引く)。また太田出氏らによって近年おこなわれた太湖漁民の信仰調査研究によれば、太湖周辺では漁民中心の「社」(地域の宗教組織、宗教行事)があり、たとえば吳江市七都鎮捕撈村の「太湖公義長生社」、吳江市廟港鎮漁業村の「太湖興隆社」などが存在する。『常州市志』第二巻には、

在太湖大船漁民中、有“老宮門社”、“宮門社”、“新宮門社”、“花会”、“太湖長生社”等宗教組織。

小船漁民中、有“興隆社”、“先鋒社”、“加興長生社”、“吳江新宮門社”、“新長生社”、“公興班”、“打搶会”、“大鑼班”、“石湖大社”等組織。蘇州地区以“興隆会”實力最強。

とみえ、太湖周辺の大船漁民と小船漁民のあいだにさまざまな「社」が形成されていたことが知られる。既述の旗に「蘇州府太湖興隆社 進香」とある中の「興隆社」は、太湖周辺の漁民の「社」のなかでも最も有力な組織であったことが知られる。天竺進香において出会った一団は、上天竺観音を参拝していた太湖興隆社を構成する漁民であった。

お わ り に

天竺進香の調査においては、聞き取りが主体となる。まだ調査を開始してから数年のため、資料の蓄積も少ない。范祖述『杭俗遺風』に記された「天竺香市」「下郷香市」「三山香市」の三つの香市のあとづけも今後の課題である。上天竺寺、上天竺観音信仰の現代にいたるまでの総合的学際研究は、いましばらくフィールド調査を重ねて完結する予定である。

〔調査協力者〕杜振華氏(杭州市仏教協会、秘書長)、靈隠禪寺・光泉禪師(監院、杭州市仏教協会会長、杭州仏学院院長)、徑山寺・戒興禪師(監院)、上天竺寺・念勇法師(監院)、靈隠寺・定源禪師(国際仏教学大学院大学博士課程)

〔主要参考文献〕

冷 曉 『杭州仏教史』 杭州市仏教協会、1993年

〃 『杭州近代仏教史』 杭州市仏教協会、1995年

〃 『天竺史話』 上天竺法喜講寺販売、1998年

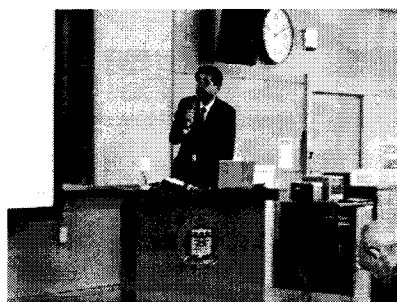
杭州市地方志編纂委員会『杭州市志』第2巻民情風俗篇第6章民間信仰第1節香市・庙会

常州市地方志編纂委員会『常州市志』第2巻

徐 一智「明代上天竺講寺観音信仰之研究」『法光学壇』2003年第7期

〃 「明代上天竺講寺所獲得的捐獻之研究」『史匯』2003年第7期

- 菅原昭英「中国の寺院はどう復興しているのか—1985年秋の浙江省」『中国佛蹟見聞記』7、駒沢大学中国
佛教史蹟参観団、1986年
- 鈴木智夫「明清時代江浙農民の杭州進香について」『史鏡』13、1986年
- 石川重雄「杭州上天竺寺に関する一考察」『社会文化史学』21、1985年
- ” 「杭州上天竺寺と住持僧」『立正史学』61、1987年
- ” 「宋代勅差住持制小考—高麗寺尚書省牒碑を手がかりに」『宋代の政治と社会』汲古書院、1988年
- ” 「宋代祭祀社会と観音信仰—「迎請」をめぐる」『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』
汲古書院、1993年
- ” 「中国“天竺進香”への誘い—1200年の時空を超えた上天竺観音—」『第1回四国地域史研究大会
公開シンポジウム・研究集会報告書』2009年。
- ” 「宋代上天竺寺与上天竺観音信仰」何忠礼主編『南宋史及南宋都城臨安研究』下、人民出版社、200
9年。
- ” 「圍繞東福寺藏「佛鑑無準禪師行状」—南宋寺院制度補論—」『国際社会科学雑誌』2009年4期
(予定)、杭州市社会科学院。
- 金井徳幸「宋代の村社と仏教」『仏教史学研究』18-2、1976年。
- 袁 震「太湖漁俗考察」『蘇州大学学报(哲学・社会科学版)』1993年。
- 太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究—地方文献と現地調査からのアプローチ』汲古書院、20
07年。
- 濱島敦俊『総管信仰—近世江南農村社会と民間信仰』研文出版、2001年。
- 鄭振鐸『中国古代版画叢刊』全四冊、上海古籍出版社、1988年。
- 宋・佚名撰『天竺靈籤』（復刻版）、台北・広文書局、1989年。
- 酒井忠夫(他)『中国の靈籤・葉籤集成』風響社、1992年。
- 石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究(一)(二)(三)(四)」『駒沢大学仏教学部論集』13・14・
15・16号、1982・1983・1984・1985年。
- ” 「中国の五山十刹制度について」『印度学仏教学研究』31-1、1982年
- ” 「史弥遠と禪宗一如浄の五山入院の背景を中心として」『宗学研究』26、1884年。
- 羅翠恂「岐阜県永保寺千手観音像—杭州の上天竺寺靈驗観音像依拠説の検討—」(発表要旨)『奈良美術研
究』4、2004年。
- 劉長東『宋代仏教政策論稿』巴蜀書社、2005年。



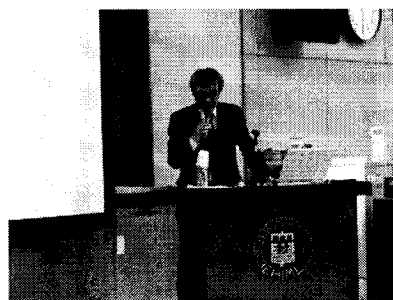
石川重雄氏報告



大稔哲也氏報告



会場案内



広末雅士氏報告